白鳥

森岡　正作

拍手の己に響く神無月

一閃の日矢白鳥を捉へけり

ぞろぞろと来て白鳥に見られをり

白鳥を観覧式のやうに見る

大口を開け短日の道具箱

山神へ黙礼捧ぐ薬喰

しらしらと燃ゆる枯菊憂国忌

蓮掘りの

十一月末に超結社有志の十数名で一泊二日の筑波山吟行へ出かけた。一番のお目当ての筑波山は予想もつかなかった雷と土砂降りの雨に遇って断念し、二日目の出発時も小雨模様で、運のない旅と思いつつ向かったのが蓮田であった。見渡す限り荒涼な景であったが二人（夫婦）の蓮根掘りの姿を認め、マイクロバスで狭い道に入り込んだ。最初は離れた場所から眺めたり写真を撮っていたが、俳句吟行の者ですとお願いしたらすぐ傍までどうぞとのこと、二十分程見学させて頂いた。「蓮掘り」の名句は多く、登四郎先生の御句にも〈**蓮掘りの終りはつひに放り出す**〉がある。収穫は泥の中での大変な作業であるが、今はポンプで送り出されたホースの水圧で泥を掻き分けて体も動き易く「放り出」したりはしない。先生の見た頃は身動きもままならぬ重労働だったのであろう。はたして昼の句会では佳句が多く、ことん見つめる作者の姿勢が勉強となった。今回の吟行記は「俳句界」二月号に掲載される予定であり、ご覧いただければ幸いである。